

한
과

恨はんと抵抗

金芝河と南朝鮮の詩人たち

卞宰洙

저
항



卞宰洙（ピョン・ジェス）

1959年早大露文科卒業。1961年早大大学院露文専修科修士課程卒業。雑誌「新しい世代」編集部にて同誌創刊にたずさわる。東京朝鮮中高級学校教員を経て1964年朝鮮大学校教員。現在同大学校外国語学部教員。在日本朝鮮文学芸術家同盟員。

主な著書・論文

『現代文学読本・金芝河』（共著・清山社刊）、「朝鮮と小熊秀雄」（『小熊秀雄研究』所収・創樹社刊）、「忍冬の韓国の詩人たち」、「80年代南朝鮮文学の展望」その他。

主な訳書

『現代朝鮮短篇集』（1～4巻）、石潤基『戦士たち』、鄭允模『受難の青春』、全泰壹遺稿集『炎と青春の叫び』（以上いずれも朝鮮青年社刊）。集団創作『不滅の歴史』、集団創作『血の海』、集団創作『ある自衛団員の運命』（以上三冊朝鮮画報社刊）

へん
恨と抵抗

0098—0150—4249

1981年10月1日 初版第1刷発行

定 価 2000円

著 者 卞 宰 洙

発 行 所 株式会社 創樹社

電話 東京 815・3331(代) 振替東京 2・154580

東京都文京区湯島 2・2・1 ☎113

装 画 呉 日

本文印刷 松澤印刷

装本印刷 広 陵

製 本 美行製本

1981© 卞宰洙 乱丁・落丁本はお取り替えます。

恨^{はん}

と

抵

抗

——金芝河と南朝鮮の詩人たち

卞

宰

洙

創樹社

本書を南朝鮮の民主化と祖国統一のためにたたかっているすべての人びとに捧げる

目 次

I 朝鮮抵抗詩史試論

7

はじめに―暴動民謡―義兵歌謡と愛国的漢詩―愛国的文化運動と詩歌―
唱歌―自由詩―プロレタリア詩―暗黒の時代の詩と民謡―革命歌謡―前
衛詩人グループ―参与文学論争と抵抗詩

II 七〇年代における南朝鮮文学の動向

I 民族文学創造の道程

101

2 詩人と抵抗―梁性佑の場合―

121

3 ファシズムとたたかう詩人―高銀の場合―

141

4 南朝鮮文学にみる反日思想

153

5 月刊『対話』休刊の意味

182

6 「韓国」文学瞥見―抵抗とたたかいの文学を―

189

Ⅲ 金芝河——詩と生と

Ⅰ 金芝河の文学的評価をめぐって

——南朝鮮の新聞と雑誌にみる——

205

Ⅱ 金芝河氏を擁護する——石川達三氏の金芝河氏批判への批判——

227

Ⅲ 金芝河——詩とたたかい——

248

Ⅳ 戯曲「金冠のイエス」を読む

273

付Ⅰ 南朝鮮における金芝河論(抄)

281

Ⅱ 「金芝河論」参考文献

300

あとがきにかえて

303

I

朝鮮抵抗詩史試論

はじめに

朝鮮における抵抗詩は、支配階級の圧制に抗する人民の側からうたわれた自由と解放の詩と、外勢の侵略に反対するたたいの詩とに大別することができる。しかし、こうした類別は、日本帝国主義の朝鮮侵略が露骨化する一九世紀の後半以後は、抵抗詩のほとんどが、日本帝国主義をたたいの対象とするものとしてつくられるために、さほど大きな意味をもたなくなる。

したがって、朝鮮抵抗詩の叙述にあたっては、近代朝鮮文学の開花期以前の甲午農民戦争^①の過程でひろくうたわれて「暴動民謡」と名づけられた民謡と、日本の侵略に抗してたたかった義兵闘争^②のなかから生まれた漢詩および民謡形式の詩にその濫觴をみても、大きなまちがいはならないであろう。甲午農民戦争と反日義兵闘争をつうじてつちかわれた抵抗詩の精神は、世紀末から今世紀初頭にかけて展開された国権回復をめざす愛国文化啓蒙運動にひきつがれ、新たに「唱歌」形式の抵抗詩をつくりだし、それはやがて朝鮮における新詩（新体詩Ⅱ自由詩）の出現をもたらすのである。

本稿は朝鮮の近代詩史のうち、その精髓をなす抵抗詩の流れをたどるものであるが、八・一五解放後の詩については、南朝鮮のものだけをとりあげた。解放後の朝鮮民主主義人民共和国では、詩の創

作が大衆的な開花期をむかえるのであるが、これについては稿をあらためて紹介するつもりである。

注1 甲午農民戦争(東学革命) 一八九四—一八九五年、全瑛準(後述)の指導のもとに展開された大規模

な農民戦争。一九世紀末の封建統治の腐敗と素乱、外来帝国主義勢力の侵略に反対して広範圏にわたって生じていた農民たちの暴動を背景とする。「斥倭斥洋輔国安民」をスローガンとした。

注2 義兵闘争 もっとも代表的なのは豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に、官軍とは別に各地で兵を起してたたかわれた人民大衆の闘争と、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、日本帝国主義の朝鮮侵略に反対して展開された闘争がある(本稿では後者のたたかいをさす)。主に地方の儒生を将帥とし、農民が自発的に決起するというかたちでたたかわれた。反日義兵運動とも呼ばれている。

I 暴動民謡

一九世紀の後半にいたると、朝鮮では、一八世紀に萌芽をみせはじめた資本主義的生産関係が封建的社会制度と対立し、その矛盾がしだいに深刻化するにいたった。そして、李朝封建統治者による膨大な土地の私的占有、支配階級の派閥争いと政治の腐敗、搾取と圧迫の強化などが人びとの生活を極度に悪化させ、これが原因となって封建制度は瓦解をはやめていった。しかしながら、朝鮮における資本主義的生産関係は、固陋な封建的支配階級の旧制度維持政策と帝国主義列強の侵略によって正常な発展をみることができなかった。

一八六六年にアメリカの武装艦シャーマン号の不法侵入に抗してこれを撃沈した朝鮮の民衆は、同

年のフランス武装艦の侵入も撃退し、一八七一年の再度にわたるアメリカ艦隊の侵入に対しても大きな損害をあたえて挫折させた。このように、米仏の侵略艦隊を撃破したものの、朝鮮は、軍事力の強化をはかるいとまもなく、つぎに日本帝国主義の侵略をうけねばならなかった。

一八六八年の明治維新以後、日本帝国主義は、王政復古のなったことを朝鮮政府に通告すると同時に、従来の隣善関係を破棄し、新たな国交関係の樹立を名目に不平等条約の締結を強要した。明治政府がいわゆる「征韓論」にもとづいて朝鮮出兵を決定したのは、明治維新後わずか五年の一八七三年のことであった。一八七五年にはすでに軍艦雲揚号が朝鮮の西海岸一帯と江華島に侵入して放火、略奪をはたらき、翌七六年に至り「朝日修好条規」（「江華島条約」ともいう）に武力をもって強制的に調印させた。この雲揚号の侵入と、まったくの不平等条約である「朝日修好条規」締結の強要は、日本帝国主義による本格的な朝鮮侵略の開始であった。

以後、日本帝国主義は日露戦争をはさんで、一九〇四年から一九〇七年の間に朝鮮の自主権を奪い、植民地化をすすめる目的でつくられた「韓日議定書」（一九〇四年）および「乙巳保護条約」（一九〇五年）の強制調印、「韓国統監府」⁽¹⁾（一九〇五年）の設置、韓国軍隊の強制解散（一九〇七年）など、強大な軍事力を背景にしてつぎつぎに侵略政策をおしすすめた。そしてついに一九一〇年には「韓国皇帝陛下ハ韓国全部ニ関スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本国皇帝陛下ニ譲与ス」（「日韓併合ニ関スル条約」第一条）という条約を強制締結させ、朝鮮を完全な植民地として占領した。

このような日本帝国主義の侵略とそれをゆるす無能な支配階級に対して、朝鮮人民は、決して拱手傍觀せず、さまざまなかたちで反日反封建闘争をくりひろげた。

一八八二年に日本帝國主義と腐敗政權に反對して軍人が決起してたたかい（壬午軍亂）、八四年には、近代朝鮮の代表的ブルジョア革命家である金玉均（一八五二―九四）をリーダーとする開化派によってブルジョア革命（甲申政變）が決行されたが、いずれも日本の干渉によって失敗に歸した。

一八九四年には、日本帝國主義の侵略と封建的虐政に反對して、綠豆將軍と呼ばれた全臻準の指導のもとに朝鮮近代史上最大規模の農民反亂である甲午農民戦争（東学革命）がたたかわれた。そして、この朝鮮全土を震撼させた農民戦争の過程で、朝鮮近代詩における最初の反日抵抗詩ともいふべき多くの民謡調の歌がつくられたのである。一般に「暴動民謡」と名づけられているこれらの歌は、文字どおりのたたかいの歌であった。

死んだ 死んだ 視察官が死んだとさ

朝鮮の改化をやめ 日本を改化させようとして

ある裏通りで 閻魔鬼神になったとさ

彈丸をくらったとさ

オハドンドン オハドンドン エハオオタブル

勢いよく進む 平和と豊年がやってくる

狩りに行こう 狩りに行こう 鴨の浦へ

日本人狩りに行こう

オハドンドン　オハドンドン　エヘオオタブル
勢いよく進む　平和と豊年がやってくる

〔「兵丁歌」第二、三連〕

これは農民軍の行進曲としてうたわれた暴動民謡の代表作のひとつである。この歌は「斥洋斥倭」（西洋と日本を排斥する）、「輔国安民」（国をたすけ民を安んずる）のスローガンをかかげて決起した農民軍の意気とたたかいの目的とを簡明直截に表現している。歌詞のうち「日本人狩りに行こう」という一節が強烈な印象をあたえる。この部分は朝鮮語では「ウェノム（漢字で「倭奴」と書く）サニヤンカセ」となっているが、「倭奴」とは日本人の蔑称であり、「サニヤン」は「狩、狩猟」という意味である。この端的な抗日意識の表現は、当時の日本帝国主義の目にあまる侵略行為に対する朝鮮人民のこたえだとみるべきである。

甲午農民戦争は外国勢力、とくに日本軍の直接的介入によって血の海の中で敗北し、指導者の全瑋準は捕えられて死刑に処せられた。そして農民たちから敬慕された全瑋準の死は、一篇のすぐれた民謡を生み出した。

鳥よ鳥よ　青い鳥よ
緑豆畑にや　おりるでない
緑豆の花が　ほろほろ散れば

緑豆餅売りが 泣いていく

童謡として親まれている「緑豆鳥」の一節である。「緑豆」というのは全瑛準の幼名で、この歌にはかれへの追慕の情と農民軍敗北の悲哀が「四・四調」のリズムの中にただよっており、当時から現代にいたるまでひろく人口に膾炙されている歌である。

たたかいの歌としては、すでに、一八一一年の平安道農民戦争、一八六二年の晋州農民暴動の時期にも「乱世になった」、「昨夜連判状が廻された」など、農民の不屈の意志と楽天性をうたった暴動民謡がつくられているが、このジャンルで成熟をみたのは、やはり甲午農民戦争の時期につくられた前述の「兵丁歌」や童謡調の「緑豆鳥」などの作品であろう。そして、外勢に反対し虐政に抗するたたいのなかから生まれた多くの暴動民謡は、のちの朝鮮近代文学に人民性と民族性をあたえるうえで大きな影響をおよぼしたのである。

注1 韓国統監府 一九〇五年から一九一〇年の、いわゆる「韓日合併」までの五年間にわたって設置されていた日本帝国主義の朝鮮統治機関。初代統監は伊藤博文。

注2 全瑛準（一八五三～一八九五） 甲午農民戦争の指導者。官吏の子として生まれたが、封建的悪政に反対して一八九四年二月農民軍を組織。全羅北道の全州を占領し政府側との講和を結んだが約定は履行されず、その後全国的な農民蜂起を指導する。しかし忠清南道の公州で日本軍に支援される装備のよい官軍と戦い敗退、捕われてソウルで処刑される。

2 義兵歌謡と愛国的漢詩

甲午農民戦争を契機として朝鮮全土にひろがった農民暴動はやがて義兵闘争へと発展し、この闘争の過程で朝鮮詩のジャンルに「義兵歌謡」と呼ばれるたかいたかの歌が生れた。

いうまでもないことであるが、農民戦争および義兵闘争における主力部隊は農民たちで構成されていた。そしてかれら農民は、伝統的な民謡調にもとづいて義兵の闘志と勇敢さ、日本侵略軍に対する敵愾心などを力強くうたい、多くの義兵歌謡をつくりだしたのである。

義兵歌謡の代表的な作品としてあげることができるのは、洪範図⁽¹⁾のひきいる義兵隊をうたった「義兵隊歌」と、義兵の行進曲としてうたわれた「グンパッパ」などである。

五連発銃の弾丸は さびついて

火縄銃の銃身からは 硝煙がただよう

エヘヤ エヘヤ エヘンエヘン エヘヨ

倭奴^{ウナム}の軍隊 全滅だ

倭奴が下駄を海にすて

東萊釜山を去る日は いつかくる

エヘヤ エヘヤ エヘンエヘン エヘヨ